

文化と身体の交差点としての食

文化固有性・産業化・異業種ネットワーク

風戸真理（北星学園大学）

1. はじめに

本分科会では食を集団的な文化と個人的で自然な身体の交差点に位置づけ、食に関する文化固有性・産業化・異業種ネットワークについて、日本・モンゴル・中国の事例をとりあげて検討する。具体的には、自給自足の食生活から、農産物の流通・加工・産業化、トランスカルチュラルな状況での扱い、観光産業との結びつきに至る「食文化」の連続性と断絶の様相を検討する。

2. 文化固有性・産業化・異業種ネットワーク

これまで食文化研究では、文化固有の要素が想定され、その諸変化が国家の政治・経済およびグローバルな状況の変化との関係で分析されてきた。しかし飲食が人間の生存に直結していて、地球上の75億人が毎日数回おこなう身体的な行為であることに鑑みれば、飲食に関わる諸個人の身体への注目が不可欠である。

本分科会では、①文化的な固有性と商品化、②産業化される食とこれに対抗する動き、③ツーリズムやナショナリズムなど他の産業や国家の政策との結びつき、に焦点を当てる。そして、6カ国（日本・モンゴル・中国）の事例を検討する。

結果として、①各文化に特異的な社会関係・儀礼・宗教が飲食物の摂取方法に規範を与えている。それと同時に、食べ物はすべて生物資源の採取や栽培・飼育により生産されたもので、自然に強く依存している。このため季節や作り手による品質のばらつきが発生し、これが抑制されたり、逆に意味が認められたりしている。②強く産業化された食は生産・流通の合理化と収益増大へ向かう競合のアリーナとなっていた。ただし、工業的な食糧流通への懐疑が生産者と消費者の両方から提示され、オルタナティブとしてのオーガニック栽培や生産地での個別取引が台頭していた。③食文化は諸個人の生活様式と切り離すことができないのと同様、経済・社会のあらゆる領域にくい込み、ローカルな飲食物がツーリズムと結びつくなどの異業種間連携がみられた。

以上から、食文化を社会の様々な領域を映し出す鏡とみなし、「集団的な文化」と「自然で個別的な身体」との関係进行分析していく。なお本研究は文化＝社会に焦点を当てるため、経済的不均衡を背景とした飢餓や栄養問題や個人レベルの摂食障害等は扱わない。

3. 方法論としての実食

本共同研究*には方法論的な独自性がある。それは研究会の度に実食をおこない、その共食の場での言動や飲食物への意味づけのあり方を調査する点にある。研究会中や研究会後の多様な飲食物を共食し、共食の場での身体的な感覚や社会的相互行為に関するアンケート調査とディスカッションをおこなった。

食文化研究においては、研究者の個人的・自文化的・フィールド的な偏向の精査が重要な課題であると考えられる。このため、研究者自身の実食場面を調査対象とし、各人の飲食に関する行動・理念・意味づけ・感覚を自覚する作業を共同でおこなってきた。

4. 文化と身体の交差点としての食

本分科会では、集団的な食文化と、その中に位置づけられると同時に個人的でもある個別の身体が、どのように交差するのかを、共同研究会での飲食経験を踏まえて議論する。事例として扱うのは次の4つのテーマに渡る5報告である。

①飲食物の自給／商品化／工業化 | 山口睦・寺尾萌

近現代日本では冠婚葬祭の献立や贈与で、自給食材や家庭料理が既製品や外注料理に置きかわり、現代モンゴル国では遊牧民が乳蒸溜酒などの乳製品を自給しつつ一部を商品化し、穀物蒸溜酒の消費が増えている。飲食物の商品化と共食等の社会的行為の関係を議論する。

②主要な流通システムと個別化 | 井上淳生

日本の食のシステムは主流市場と接続して産業化されているが、生産方法としての有機農業や自然栽培、流通方法としての直売など、個別化への挑戦を照射する。

③トランスカルチュラル状況の食文化 | 尾崎孝宏

中国では漢民族が少数民族の文化を体験する観光様式が人気である。そこでは民族料理が、漢民族の嗜好を取り入れつつも主要な観光体験として提示されている。

④文化と身体の交差点 | 風戸真理

モンゴル国牧畜地域の日常生活では、家族の食事は全国均一的で、訪問者への饗応に地域性がある。集合的な文化と研究者を含む飲食する身体の関係性を考察する。

* 本共同研究は2018年度サントリー文化財団助成研究「文化と身体の交差点としての食：文化固有性・産業化・異業種ネットワーク」（代表：風戸真理）の一部である。

キーワード 食文化、身体、民族文化、商品化、産業間連携